

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（1―3は問いの都合でつけた番号で、物語のまとまりを示したものである。また、省略した部分がある）。

交通事故で両親を一度に失い、引き取られた伯父夫婦の家でも心ない扱いを受けた小学校三年生の太輔は、福祉施設「青葉おひさまの家」で暮らすことになった。  
「青葉おひさまの家」でバザーが行われることになっていた夏休みのある日、商品にするはずだったキルトが誰かの手によってだめな状態にされているのが見つかったため、バザーは中止になり、その売り上げで行くことになっていた旅行も取りやめとなった。

1

「……こんなこと、青葉の家に来てから初めてだよ。私はみんなの先生じゃないし、正直、なんて言っているかわからないけど」  
みこちゃん（みこ）はちらりと、食堂の隅のテーブルを見る。そこには、昨日まではかわいいキルトグッズだった布が山とわっている。縫い目がちぎられてしまっていたり、どこかがはさみで切られていたりして、もうグッズとしては使えない。こんなものを売るわけにはいかない。

太輔は太ももをつねる。  
「もし、正直に申し出てくれるなら、その子は、私のところに来てほしい。そして理由を聞かせてほしい。もちろん今じゃなくてもいいよ。誰かやっているのを見ました、とかじゃなくて、自分がやりました、って、その子だけ言ってくればそれでいいから」  
手芸クラブのうちのひとりが、あくびを噛み殺している。

「今日はもう、バザーは中止です。みんな、部屋に戻ってください」  
みこちゃんの言葉が合図となって、ばらばらと子どもたちが席を立ち始めた。太輔はひとり建物の外へと出た。じーじーと耳元で鳴っているような蟬の声を掻きわけて歩く。裏庭を掃除していたときに見つけた、もう誰にも使われていない小屋を目指す。

夏の朝は、もう昼間と同じだ。どこかに隠れようとしても、全身をびっぴかに照らされてしまう。むきだしのふくらはぎに雑草が擦れてくすぐったい。背中を覆うTシャツの布に、じつとりと汗が染み込んでいく。誰もいない空っぽの小屋のそば、しゃがみこんだ太輔は頭を下げて背中を丸める。自分のことをできるだけ小さくしようとする。

2

3  
お母さん、お父さん、と、呼ぶことができなかった。そうして日々を過ごしていくうちに、伯母さんは目を合わせてくれなくなり、伯父さんは体を叩いてくるようになった。  
4  
「暗いやつは嫌いなんだ」  
伯父さんにすすめられた少年野球チームに入りたくないと言ったときは、そんな言葉の中、テレビのリモコンで背中を叩かれ続けた。「何か言え」そう言われたから、痛い、と言った。すると、「うるさい」ともつと叩かれた。

太輔を引き取ったお父さんの兄夫婦は、子どもがいなかった。新しい家はもとと住んでいた町から車で四十分ほどのところにあつたので、小学校も転校することになった。はじめはふたりとも、とてもやさしかった。まるで初孫みたい、と伯母さんは特に喜んでくれた。だけど太輔にとって、会ったこともないようなその親戚はどうしたって他人だった。お母さんはお母さんと呼ぶための言葉だし、お父さんはお父さんと呼ぶための言葉だった。他の誰も、その名前前で呼んではいけないと思った。

だけどもふたりは、特に伯母さんは、自分をお母さんと呼ぶことを強要してきた。毎日、毎日。  
引き取られるその日、太輔は、お父さんに買ってもらった黒いランドセルの中にお母さんの作ったキルトをできるだけたくさん押し込んだ。やわらかいキルトはすぐにふわりと膨らんでしまうので、詰め込むのにも時間がかかった。やがて玄関のドアが開く音がした。伯母さんが迎えに来たのだ。太輔は急いだ。

A

最後に詰め込んだひとは、青と水色のチェックのAだった。  
お母さんは、よくキルトを作っていた。たまに家に人を呼んで、教室のようなこともしていた。コンクールで賞をもらって、大きなホールに作品が展示されていたこともあった。  
お母さんはキルトを作るとき、まず布をばさつとはためかせる。そのときに起こる風のにおいが太輔は大好きだった。

伯母さんと伯父さんは、太輔の前で絶対に肉親の話をしなかった。それは、太輔の心を傷つけないようにという配慮ではなく、はじめから話題にしようとしていないのだった。まるで太輔の両親などいなかったかのように振る舞いながら、自分たちをお母さん、お父さんと思わせようと、とにかく必死だった。

この人たちに見つかってははいけない。そう思った太輔は、たまたま布団の間にキルトを隠した。伯母さんが布団をたたんで見つけてしまうなんて、そんなことそのときは考えられなかった。

キルトを布団の下に敷いて寝ると、お母さんとお父さんの夢をよく見た。  
ある日、布団の下からキルトを見つけた伯母さんは、お母さんになつてくれるものを全て処分した。

「こういうものがあるから、太輔は私のことお母さんと呼んでくれないのよ」写真も、キルトも全て捨てられた。ランドセルの中に隠していた給食袋は、見つからなかった。

それから、いままでもみだりに夢を見られなくなった。枕の下に給食袋を敷いてみたけれど、それでも夢は見られなかった。だから太輔は、必死に思い出した。叩かれたところが痛むときは、自分の太ももをつねってその痛みを散らすとした。

「ほら、太輔とお父さん、そっちとそっち持つて」  
お母さんのことはいつも、声から思い出される。

「こう？」  
お父さんとふたりであたふたしている、カメラを抱えたお母さんが、冷静に指示してくるのだ。いつもそうだった。「太輔、腕びーんて伸ばして、低いから、そう、あー、お父さん入ってる。別にお父さんは入らなくていいから」コンクールの一次審査は写真のみ、二次審査に進んで初めて現物を見てもらえる。それを通過してやっとコンクールに出品できるのだ。作品は大きいから、こうやってみんなで手伝わないと全体をきれいに撮ることができない。

「なんか今回、今までのとちがう？」  
表側を覗き込みながら太輔は言う。どれどれ、とお父さんも覗き込む。「だからお父さん顔入っちゃってんだって！」これまでのキルトは、どちらかというと女の子が好きそうな感じだった。ピンクと赤のハートだったり、水色の模様だったり。だけどこのときは、ベースの色が藍色のような暗い色で、ぼつぼつと黄色や白がちりばめられていた。夜空のように見えるけれど、それにしては明るくてやさしい。

思い出す。思い出す。  
「今回はね、ちよつと変えてみたんだ」  
さすが太輔は気づくねえ、とお母さんが笑い、お父さんが少しスネる。

「ほら、堂（だう）祭り。なんだかんだ今まで行けてないでしよう。今年は一緒にいきますようにっていう、お願いも込めてね」  
申し訳なさそうに「仕事がなかなか……」と俯（うつむ）くお父さんに、わかっているって、と笑いかけている。

5  
二人がいなくなる直前の記憶。磨り減りそうになるたびに、無理やり思い出して、もう一度塗り固めていく。  
「ハイそのままキープキープ、じゃあ撮るよ」  
思い出す。声を、会話を、温度を、あの家を、表情を、話し方を、目を、指を、ひとつも残さず、必死に。

シャッターが押されるその瞬間、太輔はぎゅつと目を瞑（つぶ）った。  
「ちよつと太輔、こんな明るい部屋でフラッシュたくわけないでしょ」  
ぎゅつと顔しかめた太輔は、とお父さんに向かって笑いかけお母さんの横顔。

新しいことを思い出したときには、ほとりと涙が出た。伯父さんに叩かれた場所が余計に痛む気がして、涙が出た。

3

「……三年くらい前まではね、この小屋でチャボ飼ってたんだった。太輔くん、チャボ、知ってる？」  
おでこを腕に載せて体操座りをしていたから、佐緒里がすぐそばにすることに全く気がつかなかった。

「小型のにわとり。けつこう大きいよね、この小屋」  
雑草が生え放題の小屋を見ながら、佐緒里が「卵産むから、たまにみんなでオムレツとか作って食べてたんだった」とつぶやいた。

「太輔くん、私のこと嫌い？」  
太輔は思わず顔を上げた。無言のまま首を横に振る。

「じゃあ、ここ、いい？」  
一度、太輔は短く頷いた。佐緒里が隣に腰を下ろしたことで、かちかちに力が入っていた全身から、ふつと力が抜け



問3 — 線3「お母さん、お父さん、と、呼ぶことができなかった」とあるが、これはなぜか。その理由を述べた次の一文の [ ] に入るのにもっともふさわしい、ひと続きのことは文中から五字以上十字以内でぬき出しなさい（句読点などの記号は字数にふくめない）。

太輔にとつては、伯父や伯母は、 [ ] としか考えられなかったから。

問4 — 線4「暗いやつ」とあるが、伯父さんはなぜ太輔をそのように言うのか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 太輔が、自分がすすめた少年野球チームに入りたくないと言ったことで、太輔とはなじめないと思い、この先太輔とともに親子として暮らしていくのは無理だと思ったから。

イ 太輔が、自分がすすめた少年野球チームに入りたくないと言ったばかりか、叩いても何も反応しないので、周囲の誰にも心を開かない子どもだと思ったから。

ウ 太輔が、自分がすすめた少年野球チームに全く興味を持たなかったことと、自分たちを父母と認めようという態度から、引き取ったのにばかにされたと思い、腹が立ったから。

エ 太輔が、自分がすすめた少年野球チームに入りたくないと言い、また自分たちを父母とも呼んでももらえないことを、伯父や伯母として恥ずかしく思ったから。

オ 太輔が、自分がすすめた少年野球チームに入りたくないと言ったことで、期待に反して活動的な子どもではなく、自分たちには溶け込もうとしないと思ったから。

問5 二つの [ A ] に共通して入るのにふさわしい三字のことはを、文中からぬき出しなさい。

問6 — 線5「二人がいなくなる直前の記憶」とあるが、「記憶」の始まりはどこからか。そのはじめの三字を答えなさい（句読点などの記号も一字とする）。

問7 2の文中から、次の一文がぬけている。どこに入るのがふさわしいか。次の文が入る直前の三字を答えなさい（句読点などの記号も一字とする）。

そうだ、お母さんは右ほほにだけえくぼができる。

問8 — 線6「かちかちに力が入っていた全身から、ふっと力が抜ける」とあるが、太輔がこのような状態になったのはなぜか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 佐緒里への不信任感がなくなったから。 イ 佐緒里への警戒心から解放されたから。

ウ 佐緒里の話し方に親しみを感じたから。 エ 佐緒里に信頼を寄せているから。

オ 佐緒里を女性として意識しているから。

問9 — 線7「心臓の周りの血液だけが、ほこつと沸騰した気がした」とあるが、この時の太輔の気持ちを説明したものとして、もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 佐緒里に責められることを覚悟していたが、別の話だったのでほつとしていた。

イ 佐緒里のことで自分が疑われていると思い、その目の鋭さに恐れを感じている。

ウ 佐緒里には心を許せないと感じ、余計なことは言わないようにしようと思っている。

エ 佐緒里には本当のことを見抜かれていたと瞬時に感じ取り、ショックを受けている。

オ 佐緒里が自分と全く同じことを考えていたことに驚くと同時に、うれしくも思っている。

問10 — 線8「だからちよつとラッキーかも」とあるが、佐緒里はどのような意味で「ラッキー」と言ったのか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 旅行に行けなくなったから蜚祭りに行くことができるので「ラッキー」だ。

イ どのような理由であれバザーが中止になって「ラッキー」だ。

ウ 蜚祭りにも旅行にも行けなくなって「ラッキー」だ。

エ バザーで働かされるより、蜚祭りの手伝いがしたかったから「ラッキー」だ。

オ 旅行に較べるとお金のかからない蜚祭りに行けるのだから「ラッキー」だ。

問11 二つの [ B ] に共通して入るのにふさわしいことはを、3の文中から二字でぬき出しなさい。

問12 — 線9「見えない何か」とあるが、これはどういうことか。これを説明した次の一文の [ ] に入るのにふさわしいことを文中から七字でぬき出しなさい（句読点などの記号も一字とする）。

太輔が、自分のしたことを佐緒里に [ ] のではないかと思っていること。

問13 — 線10「バレた」とあるが、太輔が自分のしたことに對するうしろめたさが表れている二十一字の一文を、1の文中からぬき出し、そのはじめの五字を答えなさい（句読点などの記号も一字とする）。

問14 — 線11「こんなこと」とあるが、太輔が、「こんなこと」をした理由としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 太輔の心の中では、キルトを作ることができるのはお母さんだけであり、お母さん以外の人が作ったキルトは認めることができないと思っていたから。

イ 太輔にとつて、伯父さんに叩かれたことは心の傷になっており、キルトを作ったことが伯父さんに知られれば、また叩かれることになるという意識を持っていたから。

ウ 太輔にとつて、キルトをめぐる伯母さんの仕打ちが心の傷になっており、キルトの存在を伯母さんにはわからないようにしなければと思いこんでいたから。

エ 太輔は、バザーでキルトが売れ、そのお金で旅行に行くことになれば、生前の両親と約束していた蜚祭りに行けなくなるような気がしていたから。

オ バザーができなくなれば、蜚祭りに行くことができ、その間太輔にとつては少しでも伯父さんや伯母さんから逃れられるのが救いだと思ったから。

問15 — 線12「約束」とあるが、その「約束」の内容はどういうことか。そのことを説明した次の一文の [ ] を、3の文中の [ ] を用いて十五字以内で置きなさい（句読点などの記号は字数にふくめない）。

「これからは [ ] 」という約束。

問16 [ C ] に入るのにふさわしいことはを、文中からぬき出しなさい。

問17 — 線13「野菜、ちゃんと噛んで食べなさい」とあるが、このことは太輔の深い後悔につながっていると考えられる。それはどういうことか。次の [ ① ] に入るのにふさわしいことは文中からぬき出し、 [ ② ] に入るのにふさわしい六字のことはを答えなさい（句読点などの記号は字数にふくめない）。

太輔は、自分が野菜をちゃんと噛んで食べるという、 [ ① ] との約束を守れなかったことが原因で、 [ ② ] と思っていた。

問18 太輔の気持ちが大きく揺れていることを暗に示している三字のことはを、文中からぬき出しなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

突然ですが、「これから前方右手にスカイツリーが見えます」と言われたら、普通、聞き手は何をソウテイし、どのように理解するでしょうか。前方右手というのは、自分にとっての前方の、自分の右手の方角のことだと思いますよね。でも、電車であなたと向かい合って座っている人が、「あ、右方向に〇〇山が見える」と言ったら、あなたはどちら側の窓を見ますか？あなたにとっての右でしょうか？あなたと向かい合せて座っている人にとっての右でしょうか？

では、「ここをまっすぐ行くと広場があり、そこに大きなクリスマスツリーがあって、その前の道沿いにポストがありますよ」と言われた時はどうでしょう？

日本人のあなたは、ポストはクリスマスツリーとあなたの間、つまりあなたの進行方向に近いほうの道にあると思いますよね。

でも、「ここをまっすぐ行くと、広場に大きなクマの像があります。その前の道沿いにポストがあります」と言われて、クマの像が(図1)のイラストのような向きで立っていたらどうでしょう？

この場合には、あなたにとって遠いほう、つまり広場の向こう側にポストがあると思うのではないのでしょうか。この二つの状況では、あなたは「前」を決めるとき、別の視点を使っていることに気づきましたか？クリスマスツリーの時にはツリーではなく、あなた自身を基準点にして、自分の前方が「前」だと思ったはずですが、クマの像の「前」はクマの顔のあるほうだと考える人が多いと思います。

つまり、「前」「後ろ」には二つの視点のシステムがあるのです。一つは話者が自分を中心として、自分と、自分以外の参照点との関係で、対象の位置関係を決める視点です。これを「自己依存枠」と呼びましょう。もう一つは、参照点となるモノに固有の前を中心、対象の位置関係を決める視点です。これを「参照点固有枠」と呼びます。参照点固有枠では、話者の視点は関係ありません。参照点となるモノの向きで「前」が決まります。

参照点固有枠は、もちろん参照点に固有の前がないと決まりません。木や山のように固有の前がないモノを参照点とする時には、必然的に「自己依存枠」をとることになります。でも、参照点とするモノに固有の前がある時、人は必ず参照点固有枠を使うのでしょうか？

このことを調べるため、私はまた、実験をしました。話し手の視点を(図2)のイラストのように決め、参照物体と話し手が対面するようにします。そして、位置を言いたい対象をA、B、C、Dの場所にそれぞれ置いてみます。

a、それぞれの場所で、対象物(例えばボール)は参照物体の前、後ろ、右、左のいずれにあるのか聞きました。この時、参照物体を三種類用意して、それぞれの場所について別々に聞きました。

まず、参照物体を背もたれのない、丸椅子にしてみました。この椅子には、固有の前はありません。実験はコンピュータで行ったので、それぞれの場面で「花瓶は丸椅子の\*\*にあります」という文を提示し、\*\*に最もテキトウなことを「前」「後」「右」「左」のボタンをクリックして選んでもらいました。その時、実験に参加した人たちはほぼ全員がCを前、Aを後ろ、Bを右、Dを左としました。

次に、参照物体をロボットにして、ロボットを参加者と対面するように正面向きにして、同じように文を提示し、「前」「後」「右」「左」を選択してもらいました。この場合、参加者は自己依存枠で考えても参照点固有枠で考えても前はC、後ろはAになります。

b、右と左はどちらの枠を使うかで逆転してしまいます。自己依存枠ならBがIですが、参照点固有枠ならDがIIです。結果は、六〇%の参加者は参照点固有枠を使い、残りの四〇%の参加者は自己依存枠を使っていました。①

今度は話し手から見て、ロボットを横向きにしてみました。自己依存枠ならロボットの向きは関係なく、丸椅子の時と同じ選び方をします。でも参照点固有枠で考えると、前後左右はさきほどと変わります。話し手から見て、ロボットが右向きなら、参加者から見て右が「III」、手前が「IV」になります。今度は、参照点固有枠で決める人がぐんと増え、八〇%にもなりました。②

次に、テレビを参照物体にして、話し手と対面する位置に置きました。この時は六〇%の人が自己依存枠をとりました。③

結局この実験から、人(日本語話者)は、参照物体に固有の前があっても、いつもそれを中心にした視点をとるわけ

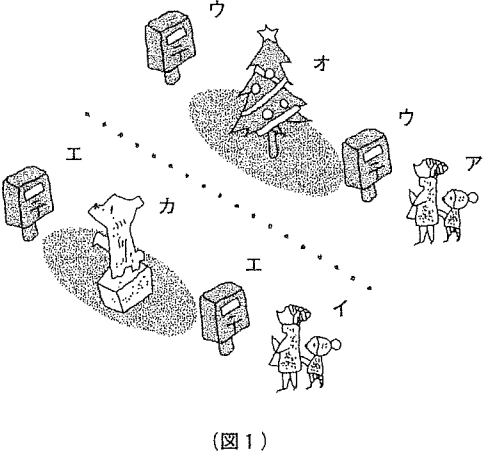
ではなく、(自分から見た)参照物体の向きや参照物体が何かということ、自分を中心にした視点と参照するモノの固有の前を中心にした視点のどちらをとるかをころと変えてしまうということがわかりました。ロボットや人、動物などはいずれも話者と対面しているわけではなく、自分で向きを変えるので、それ自身の前が視点の中心になります。のしょう。それに、テレビやコンピュータは、使うときはいつも自分と対面しているの、話し手は自分を中心に視点を決めることが多いのだと思います。さらに、モノが自分(話者)と対面しているか、横を向いているか、自分と同じ方向を向いているかでも、視点の枠のとり方が変わってしまうのです。④

丸椅子のように正面がないモノが中心になる場合は、日本人の大人はほぼ一〇〇%モノと自分の間が「前」、モノの向こう側が「後」だと考えることもあらためて確認されました。⑤

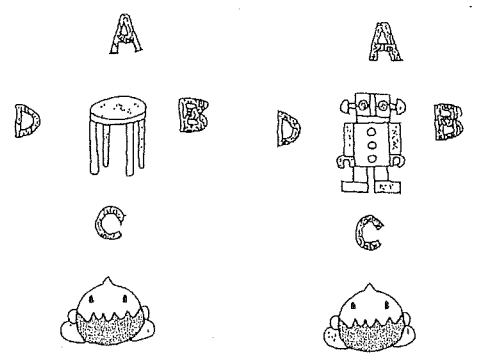
ここまでで、「前」「後ろ」という私たちが日常的に当たり前に使っていることが、とても複雑な意味を持っていることがわかりました。

ちなみに、固有の前を持たない参照物体の向きをどうやって決めるのかは文化に依存します。先ほどの実験でも確認されたように、日本人の大多数が、「丸椅子の前のコップ」は「椅子からみて自分側」だと思っています。それは私たちが、②「椅子が私たちに対面しているように考えているからなのです。しかし、固有の前を持たないモノの「前」がモノの向こう側(c)話し手にとって遠い方だとなす文化もあります。アフリカのハウザという部族がそうです。この部族の言語では、顔を持たない参照物体は、列に並ぶように、話し手と同じ方向に向いているとソウテイしています。

つまり、「前」ということばを使うには、二つの視点システムがあることを理解し、どの状況でどちらの視点をとられやすいかということを知っていなければなりません。自分と聞き手(あるいは自分が聞き手の時には話者)が、同じ視点枠を共有できているかを確かめないと、とんでもない誤解をしてしまいます。d 視点システムは、さきほどの日本語とハウザ語の例からわかるように、言語や文化によって大きく異なるので、子どもは、母語の文化特有のシステムをタイトクしていく必要があります。



(図1)



(図2)

(今井むつみ「ことばの発達の謎を解く」による)

問1——線a「ソウテイ」、c「テキトウ」、d「タイトク」のカタカナを漢字に直し、b「提示」の読みを書きなさい。

問2——①へ、②へ、③へ入ることばとしてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア さらに イ なるほど ウ いかに エ あたかも オ おそらく

14. 早実

問3 — a — d — に入る接続語としてもつともふさわしいものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ あるいは ウ および エ そして  
オ したがって カ しかも キ なぜなら ク つまり

問4 — 線1「日本人のあなたは、ポストはクリスマスツリーとあなたの間、つまりあなたの進行方向に近いほうの道にあると思いますよね」、2「この場合には、あなたにとって近いほう、つまり広場の向こう側にポストがあると思うのではないだろうか」とあるが、筆者がそのように考えたのはなぜか。その理由を説明した次の文の1、2に入ることをばを、指定の字数で文中からぬき出しなさい。

クリスマスツリーには 1 四字 がないが、この場合のクマの像には 1 である 2 一字 があるから。

問5 — 線3「一つは話者が自分を中心として、自分と自分以外の参照点との関係で、対象の位置関係を定める視点です」とあるが、この場合における「参照点」、「対象」とは(図1)のA、Bのうちのどれをさすか。それぞれ記号で答えなさい。

問6 — 線4「自己依存枠」、5「参照点固有枠」とあるが、「参照点固有枠」について説明しているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 参照点となっているモノの向きは視野に入れない。  
イ 話者の視点を中心として位置関係を定めることがない。  
ウ 参照点に正面がない場合にとられることが多い。  
エ 位置関係を定めるに際し、常に話者の視点が基準となる。  
オ 参照点に正面がある場合にとられることが多い。

問7 本文の I、IV に入ることをばとしてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい(同じものが入る場合もある)。

ア 前 イ 後 ウ 左 エ 右

問8 — 線6「結果は、六〇%の参加者は参照点固有枠を使い、残りの四〇%の参加者は自己依存枠を使っていた」とあるが、この実験の場合、六〇%の参加者が参照点固有枠を使用したのはなぜだと考えられるか。この部分の説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 日本人は、相手の存在を尊重する習慣が強いから、対象物の視点を重視して向きを考える傾向が強いから。  
イ ロボットと接する時は、常に自分の視点と向き合っていることが多いので、その向きを基準とした前後左右の方向を話者が認識するから。

ウ 日本人は、大人になるにしたがって、ほとんどの人が自己依存枠から参照点固有枠を使用することが明らかになっているから。

エ 話者は、対象物が自分と同じ方向を向いているかということを重視するため、自分の視点を中心としてロボットの向きを考えるから。

オ ロボットは向きを変えることができるので、その向きを基準とした前後左右の方向を話者が認識するから。

問9 — 線7「この時は六〇%の人が自己依存枠をとりました」とあるが、それはなぜか。その理由について述べた一文をぬき出し、最初の三字を答えなさい(句読点などの記号も一字とする)。

問10 — 線8「文化に依存します」とあるが、この場合どういうことか。その説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 位置を表すことばの意味が、地理や気候などの風土の違いによって決定されるということ。  
イ 位置を表すことばの意味が、コンピュータなどの文明の発達度合いによって左右されるということ。  
ウ 位置を表すことばの意味が、その国が歩んできた歴史によって決定されるということ。

エ 位置を表すことばの意味が、それぞれの人が属する国や民族、話す言語によって異なるということ。  
オ 位置を表すことばの意味が、学校教育で教えらるものであるもので教育制度の違いによって決定されるということ。

問11 本文では次の一文がぬけている。どこに入るのがふさわしいか。文中の①～⑤の中から一つともふさわしい場所を選び、番号で答えなさい。

つまりロボットの時と、枠のとり方が逆転したのです。

問12 この文章の表現の仕方についてふさわしくないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 問いを発しながら、読者に考えさせるように話を進めている。  
イ 実験をして、得られた事実やデータに基づいた主張を行っている。  
ウ 説明的文章であるが話しことばのような親しみが感じられる語り口を用いている。  
エ 身近な話題から入り、次第に複雑な位置関係のことばの考察へと進んでいる。  
オ 初めに仮説をしめし、様々な実例を挙げてそれが正しいことを証明している。

問13 この文章の内容と合っているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人においては、参照物体が人や動物やロボットである場合、ほとんどの人が参照点固有枠を使用することが証明された。

イ 日本語においては、参照物体がどのようなものであるかによって視点の枠のとり方が違ってくる。

ウ 日本人であれば、その場に応じてより多くの人が参照点固有枠を身につける必要がある。

エ 日本語の世界では、大人でもまず自分の視点を基準とした自己依存枠でモノの位置を考え、その後に参照点固有枠を使用して位置を考える習慣がある。

オ 日本語においては、位置を判断する場合、二つの視点のシステムがあり、それを共有していれば誤解は生じない。

(以下 余白)

14. 早実